

書店で絵本を仲介する真正の文学営為の実現

真正の課題設定
書店との共同

「チーム別専門制」による責任の醸成
本年度は「1チーム1作品」の担当制へ移行する。特定の作品について「クラスで一番詳しい存在」という専門性を持たせることで作品に対する深い愛着と責任感を育む。

書店員との「販売戦略会議」
単に場所を借りるのではなく、実社会のプロである書店員と直接打ち合わせる場を設ける。店舗のコンセプトや「どのような客層に届けたいか」というリアルなニーズを直接受け取ることで、児童は「学校の課題」を「社会的な使命」へと変換する。

本研究は、児童が作品と読者をつなぐ「仲介者」として社会に参画する、真正な「文学的営為」の実現を目的とする。昨年度はポップ制作を通じた社会実装に成果を見たが、表現が表層に留まり、読解と表現が十分に連動しない課題が残った。本年度は、児童が絵本という教材の価値を自ら見出す「読者」としての関わりを起点とし、他者へ伝える動機付けと必然性を最大化させる。具体的には、書店員との直接対話やチーム別の専門制を導入し、作品と顧客を繋ぐ「仲介者」の場を創出することで、受動的な読者から社会に働きかける能動的な読者への変容を期待する。また、広告作品の形態もPOPだけに絞らず、チームで役割を考えさせるなどして、児童の表現の幅を狭めないようにすることで、各々が考える絵本の魅力が表現できるようにする。さらに、絵本特有の表現上の仕掛けに着目する読みの視点を獲得させることで、言葉と絵が織りなす豊かな世界を深く味わい、生涯にわたって読書を主体的に楽しむことができる読者の育成に励む。

「鑑賞」から「仲介」へのパラダイムシフト
文学教育を教室内の閉じた「読解・鑑賞」に留めず、社会の中でテキストを流通させ、他者と共有する「文学的営為」の一環として捉え直す。

「媒介者」としての主体性
児童が「読者」として作品を受容するだけでなく、書店という公共の場において、作品の価値を再構成し、新たな読者へ届ける「仲介者」としての役割を学習の核に据える。

能動的な読者の育成

主題設定の理由と本研究の目的

多様な表現を促す

新たな文学との関わり方
仲介

<p>【学習計画】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 絵本の選書・書店決め ② 方略を用いた読解・分析 ③ 書店員との広告戦略会議 ④ 広告作品の考案・制作 ⑤ 広告作品の設置 ⑥ 成果分析・振り返り 	<p>【学びのコミュニティの設定】</p> <p>本実践では、多様な資質を持つ児童を授業者が事前に編成し、チーム制を導入した。男女混合を基本とし、絵画や工作、言語表現など、各々の得意分野が異なる児童を組み合わせることで、活動への心理的障壁を下げ、個々の強みを活かした広告制作を可能にした。表現方法の異なる他者との協働は、互いの「読み」を擦り合わせる必然性を生む。販売に至る過程での対話を通じ、多様な解釈に触れながら探究を楽しむ姿を期待した。</p>	<p>【学びの道具（教材・商品）の設定】</p> <p>本実践で扱う教材は、書店員との協議を経て厳選した。誰も一度は目にしたことのあるロングセラー・ミリオンセラーの絵本10作品である。かつて親しんだ作品の魅力を見直し、次世代へ語り継ぐ「伝承」の役割を活動の軸に据えた。作品ごとにテーマや対象年齢、主題が重ならないよう配慮し、それぞれの独自性が際立つよう構成されている。幼少期の記憶と現在の視点を差異を楽しみつつ、愛着を持って主体的に取り組める環境を整えた。</p>	<p>【学びのルール（活動場所）の設定】</p> <p>活動場所として協力いただいた5つの書店</p> <p>ジュンク堂書店 あべの橋本店 天満橋店・上本町店</p> <p>びりいBooks（阿倍野区阿倍野町） の君に本を（中央区瓦屋町）</p> <p>活動の制約となる「ルールの設定」では、実社会の多様性を反映させるため、協力店舗を大型店から個人店まで特徴の異なる5店舗に厳選した。これにより、店舗ごとに異なる販売コンセプトや客層を児童が考慮すべき必須条件として課している。また、授業者による事前下見に基づき、展示スペースの物理的制限を制作上の条件として提示した。さらに、書店員との「販売戦略会議」を軸に据え、店舗側の意向やニーズを直接受領させることで、独りよがりの発信に陥ることなく、プロの期待に応えようとする仲介者としての責任感を醸成した。</p>
---	---	---	--

真正の学びを保証し、仲介としての役割を促進するための場設定

本研究では、児童が「仲介者」として機能するための場設定を重視する。第一に「コミュニティの設定」として、個業ではなく共通の目的をもつチーム制を導入し、協働的な探究を促す。第二に「道具の設定」として、実社会の商品である「絵本」を扱い、その魅力を再発見させる。第三に「ルールの設定」として、活動拠点となる書店の特徴や店員からの要望を「制約」として付加する。これらの設定により、単なる学校の課題ではない「真正の課題」が成立する。児童は、書店員との対話を通して自らの役割と責任を自覚し、能動的にテキストを読み解き他者へ価値を届ける「文学的営為」へと没入していく。

【共有ノートで絵本の魅力を共有】

絵本の読解分析の際には、ロイロノートの共有ノートを活用し、「個人→チーム→個人」と立ち返る学習過程を構築した。共有ノートで他者の多様な解釈に触れ、自身の読みを擦り合わせる過程を通じ、根拠をもって伝える必然性を生みだす。これにより、自分一人では気づけなかった絵本の新たな魅力や読解視点の有用性を自覚させ、個人の読みをより豊かなものへと深化・更新させることをねらった。

【個人→チーム→個人で魅力について考える】

魅力を見つけるための4つの読みの視点
～キャラクター・絵・話の展開（プロット）・テーマ～

【書店員さんとの会議の様子】

書店員との「販売戦略会議」を軸に据え、店舗のコンセプトや展示条件を直接受領する場を設けた。実社会の文脈に自らの読みを適応させる過程で、児童には「仲介者」としての責任感が芽生え、プロに対し積極的に助言を求め能動的な姿が見られた。

【児童感想】
「レジ前あたりで絵本とポップをかざるので、責任重大ということ。（中略）私たちが手助けできなかったらいいなと思いました。」
「やっぱりただのかがみじゃなくて穴が空いていたり、ページの中にページがあったりする方が、お客さんもワクワクするそうです。だからポスターも雰囲気に合わせてのしりたいと思います」

【書店員感想】
「新しいカテゴリーを作ったりもいっていいですか？」と積極的にアイデアを出してくれたことでも嬉しかったです。少ししか説明できないのに、あの短時間でこんなにしっかりとお店のコンセプトや特徴を理解してくれていたことに感動しました。」
「皆さん様々な角度から絵本を読み込んでいて、キャッチコピーまで作って頂いてありがとうございました！私自身も気づいていなかった視点をいただく部分がありました。」

書店さんとの販売戦略会議
～書店員さんに学ぶ：絵本の魅せ方～

【広告作品制作時の様子】

児童は分析した魅力を表現する際、ポップ制作や装飾などの役割をチーム内で分担し、キャッチコピーやイラストなど各自の得意分野を活かして活動を展開した。個々の強みが融合することで、昨年度以上にグループ独自の世界観が構築された制作物へと深化している。技能の優劣に左右されず、各自の感性を絵本の世界観として具現化した、個性豊かな展示広告作品が創出された。

【実際の書店展示ブースの様子】

魅力を伝えるための広告物づくり
～展示空間の中に絵本の世界観をつくりだす～

活動前後の児童の記述分析～活動前と活動後の絵本に対する考え方の変容～

活動前、児童にとっての絵本は「絵があって想像しやすい」「平仮名で読みやすい」といった、受動的な読者としての肯定的だが表面的な理解に留まっていた。しかし、書店員との対話や広告制作を経た活動後には、「筆者が読者に伝えたいことがあった」「大人になってからの感じ方は違う」といった、作品の背景にある意図やしなやかな動機付けが劇的に変容した。単に「読む」存在から、魅力を再発見し他者へ届ける「仲介者」へと立場を変えたことで、絵本を自分たちの言葉で語るべき対象として深く再定義するに至った。

活動前後の児童の記述分析から見える本研究の成果

- ① 「仲介者」としての自覚による読解の深化
「魅力を伝えようとする」と、一番深い魅力を知るのは自分だ」という児童の言葉が象徴するように、他者への発信という「真正の課題」が、テキストを細部まで読み解く強力な動機付けとなった。書店員というプロの視点に触れることで、自己満足な読解を超え、客層や展示場所といった社会的な文脈の中で言葉を選択する責任感が芽生えた。
- ② 「しなやかに」着目した能動的な読書の獲得
「絵本に込められた思いが分かるようになった」との記述通り、文字の大きさやページ構成、色彩といった作家の「しなやか」をメタ的に捉えられた視点を獲得した。これは、単なる内容理解を超え、より豊かな読書を楽しむための確かな資質能力の向上を示している。
- ③ 協働的な探究による学びの価値付け
チーム制（集団活動）を導入したことで、自分一人では気づけなかった視点を他者との対話から取り入れ、自身の読みを更新し続ける姿が見られた。これは「個業」では到達し得なかった、多様な価値観に触れる楽しさと、協働して世界観を構築する喜びを伴う「真正の学び」の姿である。

考察① 学習活動前後の絵本に対する記述分析（児童）

保護者として、参画者としての感想 ～横並びの読者としての保護者の参画～

本研究では保護者にも一読者として、なじみのある絵本についてエピソードを募るアンケートを行った。児童に提示したり、ポスターにして書店に展示したりと、本研究に参画していただいた。

「親子で久々に絵本を手取り、母は懐かしさを、息子はむしろ新鮮さを感じた。絵本の時分魅力を読み解き、消化して伝える一連の流れを通し、大きな学びを得ることができた。」
「幼い時にはわからなかったであろう絵本に隠された思いを読み取り、他人に伝えたいという熱意に自宅でも創作意欲をかき立てられていた。ポップを飾った後も気に入り、何度も書店に足を運んだ。」

購入したお客様からの感想 ～真正の学びにおける評価～

本アンケート結果は、児童が単なる「制作者」に留まらず、読み手（顧客）の心を動かす「価値の仲介者」として機能したことを客観的に証明している。特に、大人をも唖然とさせる独自の着眼点（お母さんの愛の解釈等）は、社会的な文脈という「適度なハードル」があったからこそ引き出された、深い読解の成果といえる。消費者が「買ったくなる」と評価した事実は、国語科における「読書の力」が実社会で通用した何より多いエビデンスである。

「自分たちがオススメする絵本の何を伝えたいかがよくわかった。大人では気づけなかった視点を読み解き教えてくれたので、とても参考になった。」
「『かいじゅうたちのいるところ』の『晩ごはんではお母さんの愛！』という文章が素敵。お母さんの愛に小学生で気付いていたことに感動した。」
「物語を読み込まれていて、おすすめのページを聞くとすぐに紹介してくれた。持っていなければすぐに買いたくなるメッセージ性の強い展示だった。」

考察② 学習活動に対するアンケート調査の分析（関係者各位）

文学との新たな関わり方の可能性を考える